

# 山本栞谷《艱民図》の成立と伝来に関する考察

田中純一朗

はじめに

江戸時代後期から明治時代初期の南画家・山本栞谷（一八一〜七三）は、渡辺崋山（一七九三〜一八四二）門下の俊英、いわゆる「崋山十哲」の一人に数えられる（註1）。栞谷については、弟子の西田春耕（一八四五〜一九一〇）が著した伝記を基礎資料とするもの（註2）、今日その画業が顧みられることは少ない。

文化八年（一八一二）、栞谷は石見国津和野（現 島根県鹿足郡津和野町）に生まれた。名は謙、字は子讓。幾秀、杉亭、癡々斎などの別号がある。はじめ津和野藩家老で画を嗜んだ多胡逸斎（一八〇二〜五七）に就き、のち逸斎に伴われて江戸に出府してからは、その友人である桜間青厓（一七八六〜一八五二）と崋山に学んだ（註3）。加えて高久靄厓（一七九六〜一八四三）、椿椿山（一八〇一〜五四）にも師事する。「仏道人物士女妙、隆古琴谷称出塵」と人物画の精妙さを称えられ（註4）、山水画にも優品を遺した。また、嘉永六年（一八五三）頃、津和野藩の絵師となり、御殿内の杉戸絵制作などの画事を務めたことも知られている（註5）。栞谷が生きたのは、天保の大飢饉、幕末の動乱、明治維新による武家政権の終焉という激動の時代であった。維新後の栞谷は東京に移住し、明治六年（一八七三）、信州を遊歴中に客死する。華椿系と称される画家たちに学び、門下から猪瀬東寧（一八三八〜一九〇八）、高森碎巖（一八四七〜一九二七）、荒木寛友（一八五〇〜一九二〇）、武村耕齋（一八五二〜一九一五）らを輩出するなど、栞谷の画系は関東南画の正統に属している。

本稿では明治天皇（一八五二〜一九一二）に献上された、栞谷筆《艱民図》（以下、尚蔵館本）を紹介する。尚蔵館本は長く御物として伝来し、平成元年（一九八九）に天皇陛下（現 上皇陛下）と香淳皇后（一九〇三〜二〇〇〇）より国に寄贈され、現在は当館の収蔵品となっているが、これまで一般に公開される機会はなかった。また、尚蔵館本は二度に分かれる献上を経ていまに至るが、献上をめぐる異説があり、さらに太鼓谷稻成神社所蔵本をはじめとする複数の副本が確認されている。本稿はかかる複雑な状況を鑑みて、現時点で判明している事柄を整理しながら、尚蔵館本の成立と伝来の過程を中心に考察するものである。

## 一、尚蔵館本の概要

尚蔵館本は栞谷による画二卷（以下、本巻 図1-1、1-2）と、漢詩人・小野湖山（一八一四〜一九一〇）による題面詩一巻（以下、附巻 図2）で構成される。以下、本巻と附巻の概要を確認しよう。

### （一）本巻と付属品

紙本着色の卷子装、表紙裂は白地龍文金欄を用いる。法量は上巻の本紙が縦三一・五×横一九五七・四cm、下巻の本紙が縦三一・五×横一六四二・三cm。献上目録一通と筆者目録一通が付属する。卷子の題箋に「難民圖 山本琴谷畫」と墨書されるが、「艱民」の誤りである。題名の「艱民」は「民艱」と同義で、「民のなやみ。民の苦しみ」を意味する（註6）。ほかに尚蔵館本の名称を「窮民図」とする文献も多いが、題箋や付属品、関連する公文書の記載では「艱民図」となっている。画中に記された小題は、津和野藩権大参事・小柴縝（？〜一八八九）の筆になるが、栞谷本人の落款印章や跋はない。

本巻は明治三年（一八七〇）、津和野藩知事・亀井茲監（一八二五〜八五）より献上されたことが『於杼呂我中 亀井勤齋伝』【資料①】に記載されている。亀井は津和野藩主として幕末の政局に臨み、明治二年（一八六九）の版籍奉還で津和野藩知事（知藩事）となった。尚蔵館本の献上は、国立公文書館所蔵『太政類典』収録の公文書【資料②】にも記録されており、七月十日になされたことわかる（註7）。本巻の献上は亀井の「微忠」の表れであり、後日、宮内卿・万里小路博房（一八二四〜八四）を通じて明治天皇より「積年意ヲ稼穡ニ用ルノ厚 御満足ニ被 恩召」との褒詞を賜ることになった。

献上は亀井の名で行われたが、その実務を取り仕切ったのは、旧津和野藩士の国学者で歌人、宮内省御用掛を務めた福羽美静（一八三一〜一九〇七）である。福羽は旧藩時代から亀井の腹心として国事に奔走し、維新後は明治政府の神祇政策を推進した中心人物であった（註8）。栞谷とも同郷の知友である。

尚蔵館本の成立には、幕末以来、福羽が築いてきた政治的な人脈が深く関わって

いる。まず、上巻の巻頭には侍従・三條西季知(一一八一〜八〇)が題字「天道之休咎由人事之得失」を寄せている。下巻とも共通するが、題字は大学大監・秋月種樹(一一八三〜一九〇四)が『書経』と『漢書』から候補を挙げ、最終的には福羽が前者を採用する判断を下した。上巻の題字は『書経』の注解を典拠としており、大意は「天から人民にもたらされる禍福は、君主の行いの是非によって定まる」とでも解釈できよう。三條西は幕末に尊攘派公卿として活動し、文久三年(一八六三)八月十八日の政変を受けて、三條実美(一一八三七〜九一)らと長州へ落ちのびた「七卿落」の一人である。このとき京で尊攘派として活動していた福羽は、三條西や三條とも近しく、「七卿落」に随って長州へ下向している。宮本善士氏は、宮中歌人としての三條西と福羽の接点に着目し、明治二年に三條西が歌道御用掛を、同四年(一八七二)に福羽も同職に任命された人事を、幕末からの人脈に繋がるものと指摘する(註9)。

次に、下巻の巻頭には参議・木戸孝允(一一八三三〜七七)が題字「聖時風若」を寄せている。『書経』洪範篇で天の吉兆を述べた段にある「曰く、聖なれば時風若う」を典拠とし、「ものの本質をつかんでいればそれに応じて時期に合った風が吹く」こと(註10)、換言すれば王の聖なる徳が天の意さえ従わせるといふ、君徳の及ぶところが大なることを説くものである。幕末の志士時代から木戸と福羽は親しく往来し(註11)、木戸の日記や書簡からは、明治三年六月に福羽の依頼を受けて題字を揮毫したことがわかる(註12)。また、宮内庁書陵部図書課図書寮文庫所蔵「木戸家文書(天地人・番外・特)」に含まれる同年六月十二日付の福羽書簡では(註13)、「実は去夏以来正親町殿中山殿など、申合取調候事に御座候巻物二巻」とあり、本巻の制作が明治二年夏以前には構想されていること、秋月のほか正親町三條(嵯峨)実愛(一一二〇〜一九〇九)、中山忠能(一一八〇九〜八八)と題字を協議中であることが述べられている。

次に本巻の構成と内容を見てみよう。

【第一図 淫霖田為湖】洪水で川が氾濫し、田畑や林に浸水して湖のようになる。人家の門前まで水が迫り、人びとは途方に暮れながらも、各々対策を講じる姿を描く。時間は夜。

【第二図 腐麥爛化蝶】収穫後の作業を描くが、長雨で麦は腐り爛れ、そこから蛾が孵化して辺りを飛び交う。

【第三図 旱魃祈降雨】日照りが続いて苦しむ農民たちが、鉦鼓を鳴らしながら畦

道を練り歩き、雨乞いをする。田の水は涸れ果てて乾燥した泥土がひび割れ、水門も上がったまま、小舟は陸に打ち上げられる。祭壇を設けて香を焚き、跪拝する様子も描く。

【第四図 暴風傷禾黍】暴風によって木々がなぎ倒され、家屋も破壊される。波は荒れ狂い、稲も風によって倒される。

【第五図 羣蝗害糧稻】イナゴの大群に人びとは恐れおののく。

【第六図 洪水流人家】大洪水が発生し、家屋や人馬が濁流にのみこまれる。樹上や屋根、小舟に頼りなくしがみつき、かろうじて難を逃れようとする人びと。画面左方では、高台に逃れようとする人、必死に土嚢を積み上げて家屋敷を守ろうと奮闘する人びとを描く。

【第七図 流民飢乞食】やせ衰えて幽鬼のようになった人びとが、わずかな食を求めてさまよい歩く。紅葉した樹木が描かれ、季節は秋とわかる。

【第八図 草根纒續命】飢えに苦しむ人びとが、山中に分け入って木の根、草の根まで掘り起こして、露命を繋ぐと描く。

【第九図 窮乏民賣子】場面は一転して、酒食の溢れる華やかな妓楼となる。しかし、門前には困窮のゆえに身売りされ、泣き崩れる娘の手を引く年老いた両親を描く。

【第十図 樹皮支饑急】飢えた人びとが、山に入って樹の皮を削ぎ、それを食して空腹を満たそうとする。竹藪を抜けた先には、蕈をつぎはぎにして作ったみすばらしい天幕、汚い檻樓をまとう難民たちを描く。

【第十一図 飢渴相奪食】季節は冬。雪のなかでさらに過酷な状況に追い込まれた人びとが、わずかな食物を求めて浅ましく奪い合う。

【第十二図 抱財餓屋内】邸内にサンゴや反物など高価な家財を積み上げるが、肝心の食物がなく、家人は空腹で力なく横たわる。

【第十三図 老弱病凍餓】もはや人間としての尊厳もなく、死んだ牛馬の肉に群がり、貪り食う人びと。そのすさまじい光景を、供を連れた貴人と思しき男が憐れむように眺める。飢えた野犬が人間に噛みつくさまなど、飢餓が人間と動物の境界さえ曖昧にする。

【第十四図 困迫為強盜】わずかに残された財や食物を、野盗たちが情け容赦なく奪い去る。頭から血を流す人、衣服を奪われ呆然と座り込む人、連れ去られようとする母親に必死にすがりつく子どもなど、犯罪が横行している。

【第十五図 發倉賑貧民】富者が倉を開いて、人びとに食物を分け与える。門前に

は群衆が押し寄せ、我先に食物を得ようとするが、それを眺める邸の主人の悠然とした様子が対照的である。

第七図までが上巻、第八図以降が下巻に収められる。場面展開において、各図の時間、物語上の連続性は認められない。画風の特徴としては、近世以前の中国風俗による人物と農村の景観を、簡素な描線と平明な淡色で表している。季節や時間の推移も描き分けながら、農耕に従事する人びとを中心に描くが、牧歌的な風情にはほど遠い。度重なる自然災害によって田畑の実りや暮らしを破壊され、人心が荒廃していくさまを冷徹に描出している。

とりわけ下巻の、天災によってさらなる過酷さを増す庶民の姿は、さながら十二世紀の《餓鬼草紙》（東京国立博物館ほか所蔵）や《地獄草紙》（東京国立博物館ほか所蔵）のような古絵巻、あるいは円山応挙《七難七福図巻》（相国寺所蔵、一七六八年）などを彷彿させる。もともと、これらが仏教思想を淵源とするいっぽう、尚蔵館本の背景にあるのは、儒教的な価値観、倫理観であり、君主が徳によって善政を敷き、悪を戒めるべきことを説く勸戒思想である。勸戒画としての尚蔵館本は、描かれた内容もさることながら、題字の典故を古代中国の聖王、賢臣の言行をまとめた『書経』に求めており、絵画表象とその背景にある思想が一貫した姿勢で制作されていることがわかる。

献上者である亀井、それを補佐した福羽は、国学者・大国隆正（一七九二～一八七二）の流れをくむ、維新政権の神祇政策を主導したグループ、いわゆる「津和野派」の中心人物として知られる（註14）。津和野派の国家構想では、天皇が政治君主であると同時に国家の最高祭主を担う「祭政一致」を理想に掲げており、満年齢で十七歳の若き君主であった明治天皇を輔導（教育）し、「君徳培養」の一助とするべく、本巻は献上されたと考えられる（註15）。そうした重要な画事に抜擢されたのが旧藩の絵師・栗谷であった。制作過程において津和野派、特に福羽の政治的なネットワークが存分に活用されることで、本巻は成立したといえる。

## （二）附巻と付属品

作者は小野湖山。紙本墨書、卷子装、表紙裂に白地三葉葵文金欄を用いる。法量は本紙が縦三三・二、横五一・四cm。詩体は五言古詩で、十五首からなる。巻頭の題字「思艱圖易」は三條が揮毫したもので、題箋の「題艱民圖詩」は福羽による墨書。さらに官僚、書家の金井之恭（一八三三～一九〇七）による箱書「題艱民圖詩」

がある。そのほか福羽筆の献上目録一通と、加部巖夫（一八五〇～一九二二）が筆記し、福羽が奥書を認めた献上由来書「艱民圖のゆゑ与之」一冊【資料③】が付属する（註16）。

献上目録によれば、附巻は明治十六年（一八八三）四月、福羽が明治天皇に献上した。『明治天皇紀』明治十六年七月九日条には、以下のように記されている（註17）。

小野長慮、湖山と号す、詩を以て聞ゆ、嘗て山本琴谷筆窮民図巻を觀、毎図題するに詩一章を以てし、十二章を得たり、曩に之れを上り、乙夜の覽に供す、詩は蓋し下民の窮困を慨し、牧民の官に居る者を警めんとするにあり、乃ち之れを嘉賞し、是の日男内閣権少書記官小野正弘を召し、端溪大硯一面及び羽二重一匹を伝賜せらる、（中略）慷慨憂時の作、其の世道を裨益する鮮からざるを思召し、此の殊恩を加へたまふなり、

当日、湖山の息子が代理で参内し、端溪の硯と羽二重を下賜された（註18）。これに感激した湖山は、新設した書齋を「賜研楼」と命名し、自身が編纂した「賜研楼詩」を刊行する。『賜研楼詩』には湖山と諸家の漢詩が数十首収録され、題字を三條が揮毫し、序文を杉孫七郎（一八三五～一九二〇）、賀詞を金井、巖谷修（一八三四～一九〇五）、和歌を福羽が寄せている（註19）。

かつて尊攘派儒者として三河吉田藩政に携わった湖山は、国事周旋のため諸藩の人士と交際を広げ、そのころから栗谷、福羽とも親しくしていたと考えられる（註20）。附巻の跋によると、湖山が最初に見たのは十二図の稿本だったとされ、現状の尚蔵館本より三図少ない。その感興を各図につき一首ずつ詠んだ漢詩集『鄭絵餘意』を刊行したが（註21）、稿本段階で詠んだために三首が不足している。長年それを惜しんでいた福羽の計らいで、湖山は御物であった本巻を借覧することが叶い、明治十五年（一八八二）十二月、残りの三首を改めて賦すことになった。

尚蔵館本と『鄭絵餘意』では小題が異なるうえ、前者の「窮乏民賣子」「樹皮支饑急」「抱財餓屋内」の三図に相当する詩を後者は欠く。したがって、湖山が見たという稿本の十二図は、当然これら三図を除いたものであり、本巻の成立時に追加されたのがこれら三図ということになる。なお附巻の小題は、制作時に本巻と照合してそれに合致させている（表1）。「鄭絵餘意」に収録された既存の詩文も五言古詩であり、附巻にそのまま取り入れられているが、語句にわずかな異同がある。さらに、『鄭絵餘意』の詩文の順序から、本巻の「困迫為強盜」が稿本では第九図に置か

れていたことがわかる。

さて附巻には、尚蔵館本の成立に関わる重要な資料「艱民圖のゆる与之」が付属している。大和綴の冊子本で、丁数は四丁。尚蔵館本の献上目的を述べた副読本というべきもので、聖帝と称えられた仁徳天皇、醍醐天皇（八八五〜九三〇）の故事を引き、尚蔵館本を「萬機のみいとまにひもときたまひ、畫をみそなはしては、萬民の艱苦をおもほしやり、詩をうたはせたまひては、牧民のつかさのかたきをおもひはからせ、民をみそなはすこと子のことく、そのつかさをおもほすこと」によって、古の聖帝の御代に勝る治世が到来することを願い、「詩は有聲の畫なりと、画もとより無聲の詩」と本巻、附巻の双方が揃ったことを寿ぐものである。尚蔵館本は栗谷の南画家という特性から中国風俗で描かれ、儒教思想を背景とするのに対して、「艱民圖のゆる与之」では皇室の祖先にまつわる故事が引用されるなど、福羽の国学者としての態度をかいま見せている。

## 二、元治二年献上説の検討

ところで、湖山はいつ稿本を見たのだろうか。それが明治三年以前であることは確実だが、春耕による次の記事から推測してみよう（註22）。

先生写すところ、窮民図、十二題、

霖後出疇渺如大湖。麦実化為蝶。苦旱禱雨。大風傷禾稼。驅蝗洪水暴漲。

流民乞食。掘草根剝樹皮。盜賊成群。餓者相奪為食。病苦凍餒極其慘。施

穀粟賑窮困。

右を二巻に図し、二條家を経て、朝廷に献納し、孝明天皇の観覧に入る、後金一萬匹を賜ふ、栄といふべし、事は元治二年の頃なりき、福羽君いふ、其巻今猶ほ、御物中にありと、

因にいふ、根岸に、村山善応といふ人あり、（二條家の推察案に於て後継者山中政弘に就き）俗態の大入道なりき、漢学を、安積良斎に受け、頗る才人の評あり、隆古翁と交り深りしが、翁歿後、先生と往来し、話相手を得たるを喜びたり、遂に先生、に徳憑するに、窮民図を写することを以てす、二條家の紹介等、総てこの人の、斡旋によれるなり、

右の証言では、元治二年（一八六五）頃、二條家を介して「窮民図」二巻が孝明天皇（一八三一〜一八六六）の観覧に供されたという（註23）。ここで閑却できないのは、

二條家のネットワークである。春耕によれば、村山善応（生没年不詳）という二條家家臣が栗谷に「窮民図」を描かせ、善応を介してその情報が二條家に伝えられた。善応は湖山の友人の儒者・安積良斎（一七九一〜一八六一）の弟子でもある。また幕末の京都で、湖山は公武合体派公卿の代表格で孝明天皇の信任が厚かった関白二條斉敬（一八一六〜一七八八）の知遇を得るなど深い関係にあった（註24）。そもそも湖山が詩を詠んだのは、二條家家臣・山中弘庸（一八〇六〜一八七四）の求めに応じたとする伝聞もあり（註25）、二條家周辺の人物の存在が浮かび上がる。湖山が見た稿本は十二図、春耕の伝える元治二年献上の二巻本も「十二題」だったというから、あるいは同一の作品であった可能性も否定できない。

元治二年献上説は決して無視できないものだが、ただちに受け入れがたい点もある。まず『孝明天皇紀』と『孝明天皇実録』に「窮民図」献上とその観覧に関する記録がなく、尚蔵館本の付属品にも、明治三年以前の献上を示すものはない。春耕が「福羽君いふ、其巻今猶ほ、御物中にあり」と述べるのは、明治三年に献上された本巻と、自身が聞き知っていた「窮民図」（または稿本）とを混同したためであろう。そして見過ごせないのは、まさに福羽の存在である。仮に幕末に孝明天皇へ「窮民図」が献上されたとするなら、藩の絵師という栗谷の立場を考慮しても、津和野藩や福羽が関知しなかったとは考えにくい。しかしながら、福羽は文久三年に起きた八月十八日の政変を受けて三條ら七卿の長州下向に随っており、国元の津和野をはじめ諸方に遊説している。元治元年には、池田屋事件と禁門の変（蛤御門の変）、四国連合艦隊による下関戦争などの軍事衝突があり、第一次長州征討がなされる不穏な情勢が続いている。津和野藩も佐幕派の浜田藩を東隣に、尊攘派の長州藩を西隣に国境を接しており、予断を許さぬ政治情勢のもとにあった。そうした状況下で、「窮民図」の献上を進めることができたのだろうか。また、三條に接近していた尊攘派の福羽が、政敵ともいえる公武合体派の二條を通じた献上を画策することも考えにくい（註26）。

以上から、元治二年献上説の正否について多分に想像を交えるが、次のような卑見を述べてみたい。

さまざまな証言から、尚蔵館本には原型となる稿本（十二図）が存在したことは確かだ。稿本の成立時期は、当然、本巻が献上される明治三年をさかのぼる。亀井の伝記『於村呂我中』には、「維新前、侯、曾テ此図ヲ作ラシメ、聖上乙夜ノ覧ニ供スルノ宿志アリ」とあるから、おそらく維新前の出来事であったと仮定しよう。稿本の制作は、栗谷の個人的な交友圏にいた二條家周辺の関係者に情報が伝わり、湖

山による詠詩、二條を介した孝明天皇への献上を彼らが検討した段階もあったかもしれない。とはいえ基本的には亀井、福羽ら津和野藩関係者がイニシアチブをとり、藩の絵師として栗谷に制作が下命された。しかし、幕末の急激な政治情勢の変化が関係者を翻弄し、結局、孝明天皇への献上は沙汰止みになったのではないだろうか。そして維新後に献上の計画が再び持ち上がり、稿本の段階から新たに三図を加えた本巻が制作され、明治三年に献上、同十六年に附巻が献上される運びとなった(表2)。尚蔵館本に先行する稿本の存在こそ、情報の混乱を招いた要因であり、尚蔵館本の献上とは截然と区別しなければならないのである。

### 三、副本について―太鼓谷本、菊池家本、蔵原家本

尚蔵館本の副本としては、判明しているものに太鼓谷稲成神社所蔵本(以下、太鼓谷本)、菊池静軒旧蔵本(以下、菊池家本)、蔵原惟郭旧蔵本(以下、蔵原家本)がある。このうち現存が確認されているのは太鼓谷本のみである。以下、諸本の概要について述べる。

### (一) 太鼓谷本の概要、および尚蔵館本との図像比較

太鼓谷本は紙本着色の卷子装、乾坤二巻よりなる(註27)。題箋に「艱民圖 山本栗谷筆」と墨書され、表紙裂は紺地雲鶴文金欄を用いる。乾巻の本紙法量は縦三〇・五、横一七九〇・二cm、坤巻の本紙法量は縦三〇・五、横一四五二・七cmである。

付属品に「艱民圖献納一件文書」一巻があり、法量は縦四〇・五、横八七〇・〇cmで、尚蔵館本の献上に関わる文書類が貼りこまれている。巻頭に「救荒画巻物献上書類入 明治三庚午八月十三日」と記された紙片が貼られており、続けて収載順に挙げると、『太政類典』の公文書、本巻の筆者目録・三條西と木戸の題字・献上目録、津和野藩公用人・湯権少参事から弁官に宛てた書類など、すべて控え(写本)が貼られている。これらは『於杼呂我中』編纂時にも使用されたと考えられ、そのため同書では献上日を八月十三日としているのだろう。さらに三條西の書簡二通と、秋月、木戸、正親町三條、三條からの書簡が各一通ずつ収載されている。いずれも福羽宛の書簡(原本)であり、「艱民圖献納一件文書」が福羽の手元資料を集めたものとわかる。このうち、三條西の一通と秋月の書簡も『於杼呂我中』で引用されている。

太鼓谷稲成神社は、安永二年(一七七三)に七代目津和野藩主・亀井矩貞(二七三九―一八一四)が京都の伏見稲荷大社から勧請を受けて創建し、以来、歴代

藩主の篤い崇敬を受け、同家からの奉納品が多く伝存する。時期は不明ながら、太鼓谷本も亀井家から奉納されたとの口承がある。太鼓谷本の奉納も福羽が差配したと考えてよいだろう。

太鼓谷本も十五図からなり、尚蔵館本の上巻に相当する乾巻が七図、下巻にあたる坤巻が八図で構成される点も同様である。したがって、太鼓谷本は前章で見た元治二年献上説、また稿本とは無関係である。画中の小題は、尚蔵館本と書き入れ位置が異なる。なお坤巻では、「窮乏民賣子」の前に「樹皮支饑急」が挿入されている。しかし、「草根纒續命」から「樹皮支饑急」への場面転換が景物の連なりで自然に表されており、錯簡ではないことがわかる。

太鼓谷本は、モチーフや景観など尚蔵館本の図像をおおむね踏襲するが、細部には相違を生じている。卷子の総長は、尚蔵館本より約三・五mも短縮されており、モチーフ同士の間隔が狭まった緊密な画面空間を形作っている。色調も控えめで、筆致がより細やかな点など、尚蔵館本とは異なる描写の特徴を示している。また、所々に不揃いな紙継ぎが散見されるものの、個々の描写には修正や推敲の痕跡は見受けられず、太鼓谷本じたいの高い完成度を認めうる。太鼓谷本の制作時期にはより慎重な判断を要し、現時点で尚蔵館本の下絵、または副本のいずれであるかは定めがたい。それでなお、亀井家ゆかりの太鼓谷稲成神社に奉納され、尚蔵館本の成立事情を伝える文書類が付属し、十五図を備えた作品として唯一現存を確認できることなど、太鼓谷本はきわめて重要である。

尚蔵館本と太鼓谷本の図像的な差異は、主として人物のしぐさや衣服の描写、配置や人数の変更に表示されているほか、景物も新たに描き足されたものや反対に省略されたものがある。例えば、太鼓谷本の「早魃祈降雨」では、農家の女性と子ども(図3)、舟(図4)などを描き加えている。個別の変更図を検討するには紙幅の限りがあるが、「暴風傷禾黍」では家屋の破片(図5)を飛散させることで風の脅威を際立たせ、「抱財餓屋内」では室内の調度類(図6)を増やすことで画題の意味を強調している。このような例は枚挙にいとまないが、太鼓谷本における部分的な改変は、作品の主題を視覚的に補う効果を強めたものと捉えてよいだろう。

### (二) 菊池家本・蔵原家本の概要

日本橋の富商・菊池家は、華山と交流があった大橋淡雅(菊池淡雅、通称は佐野屋長四郎 一七八九―一八五三)の後裔にあたる(註28)。大正十二年(一九二三)の関東大震災で、同家は中国絵画や近世絵画の名品の数々とともに「山本琴谷窮民

十二図」を失い、「無価の巨宝を挙げて灰燼に附したるは長大息の至」と報告されている(註29)。明治期に菊池家本を見た春耕は、次のように述べている(註30)。

又彼の窮民図、其要を摘写し、十二葉の冊子となし、湖山老人題詩あり、款云、往年山本琴谷。応撰政藤公命。作窮民十二図。図皆精緻。此帖蓋増損其図。以成之者。可謂愈出愈妙矣。余詩亦係當時作。録為静軒菊池君清鑑。拙陋依旧。不能冊潤。是可慚也。時明治辛未秋八月稻藁生日。湖山老人長願。此の帖、今尚ほ其男脩軒の愛蔵となす、

湖山の跋によるなら、菊池家本は稿本の十二図と同じ「十二葉」という数で、画帖形式であった。さらに重要なのは、「撰政藤公」つまり二條斉敬の命で「窮民図」が制作されたとしており、ここでも二條の関与が言及されている。跋の年紀から、湖山が菊池家本を見たのは明治四年(一八七二)のことになるが、正確な制作年までは判断しがたい。跋のなかで名前が挙がる菊池静軒(一八四三〜九五)は、淡雅の息子・菊池教中(澹如 一八二八〜六二)の女婿であり、おそらく静軒の代で同家の蒐集品となったのであろう。

最後の蔵原家本は、熊本県出身の政治家、教育者である蔵原惟郭(一八六一〜一九四九)の旧蔵品であったものを、息子で文芸評論家の蔵原惟人氏(一九〇二〜九二)が受け継いだ、現在の所蔵者は不明である。

同家で「五難の図」と称していた蔵原家本については、惟人氏本人が詳しく述べているが、その発端は作家、劇作家の藤森成吉氏(一八九二〜一九七七)にあった。長年、藤森氏は創作の傍ら華山研究を続けており、『渡辺華山』のなかで、謹慎中の華山が「一代の大作」として、「天災地変を機縁とした庶民窮乏之図」に取りかかる決意の場面を書いている(註31)。むろんフィクションだが、戦後になって藤森氏は、執筆当時、熱心な華山蒐集家として知られた惟郭旧蔵の図巻が念頭にあったことを明かしている。藤森氏は「華山真蹟の点には相当うたがいを持った」が、「小説としての構図、翁〔引用者註・惟郭〕に対する好意等々」から題材に選んだという(註32)。後年、惟人氏は、それが榑谷の作品であることを突き止めたと藤森氏に話す。藤森氏に慫慂された惟人氏は、春耕「琴谷先生事略」を根拠に、家蔵の「幅三十三センチの紙に、細密な描写と設色で、人民の困窮の有様を中国の風俗でつぶさに描き出した三十三メートルにおよぶ長大な画卷」の作者を榑谷に比定する一文を発表した(註33)。そのなかで、惟人氏は春耕が伝えた孝明天皇への元治二年献上説にも言

及しながら、蔵原家本が裏打ちだけの無表装で一巻しかないことから、下絵もしくは副本の類と判断するに至った。結論からいえば、惟人氏の推断は正しい。惟人氏の文章に掲載された図版を見ると、細かな点を除けば、尚蔵館本の図像を踏襲していることがわかり、作品の法量も近似する。蔵原家本もまた、尚蔵館本の献上後に制作された副本のひとつと考えられよう。

惟人氏は日本共産党系の評論家として著名であったが、蔵原家本が「日本の美術史に珍しい社会的・思想的内容をもった作品」であることに着目し、「天保から安政あたりにかけて相ついでおこった災害を念頭において、その時に当時の上層階級や封建的支配者がとった態度や政治を批判する作者の意図が見られる」こと、「人物の風俗を中国にとつたのは、南画家の伝統によつたというだけでなく、そうした政治的批判をカモフラージュするための用意であった」とする(註34)。惟人氏の指摘は、副本の内包する思想性と時代背景を鋭く読み解いた分析として傾聴すべき点が多い。実際、湖山は附巻のなかで、本巻に描かれた惨状は、かつて自分が目撃した天保の大飢饉を連想させたと述べている。

榑谷にとつて天保年間の出来事は、師である華山の記憶と不可分のものであっただろう。華山は田原藩年寄役として、天保六年(一八三五)に義倉「報民倉」を建てて凶作に備え、領内に一人の餓死流亡者も出さず、『凶荒心得書』を提出して藩内の綱紀粛正を図った(註35)。藩主三宅康直(一八一〜九三)に対してさえ、「聖代といへども水旱も変有之。人君御方寸之実否、誠に御領中幾万人の内、たとへいかに賤敷小民たりとも、一人にても餓死流亡に及び候はゞ人君の大罪にて候」と直言して憚らなかつたことなど(註36)、『書経』にみえる儒教的な倫理観とも通底する。尚蔵館本の制作背景には、作者である榑谷自身の体験、華山という先師の凶荒時における実践などが念頭に置かれていたのではないだろうか。

#### 四、尚蔵館本の図像―焦秉貞「御製耕織図」、兪宗礼の影響について

加部巖夫は、明治二十二年(一八八九)五月の春季好古会に、自身が模写した「窮民図」一巻十二幀」を出品している(註37)。

原本は渡辺華山の画く所にして其模本藤堂伯爵の家蔵に係る明治十二年の夏請て之を觀る適賜暇に際するを以て匆々摸写す後小野湖山山本榑谷画く所の窮民図に題する詩の写本を見る其詩意此図に適合す蓋榑谷画く所の者は華山の筆意に倣ふものなり

この記事によれば、華山筆「窮民図」なるものを藤堂家が所蔵しており、明治十二年（一八七九）、同家から加部が借覧して模写したという。模写から四年後、附巻の献上に関わった加部は、藤堂家旧蔵の華山筆「窮民図」に做ったのが本巻だと推論した。注目すべきは「十二幀」という稿本に収められたのと同じ図数である。藤堂家旧蔵の華山筆「窮民図」、加部による模本、いずれも現所在は不明であるが、尚蔵館本の成立に関わるきわめて興味深い作品であることは疑いない。

ところで、惟人氏は蔵原家本に、中国清時代の宮廷画家・焦秉貞（一六六二—一七三五）の『御製耕織図』（『佩文齋耕織図』とも。以下、『耕織図』）と似通う場面があることを指摘している（註38）。惟人氏は具体的にどの図かを明言していないものの、尚蔵館本における先行作品からの影響を考察するうえで重要な示唆である。『耕織図』は勅命を受けた焦秉貞が版下絵を制作し、康熙三十五年（一六九六）に木版画として刊行された。小林宏光氏は、焦秉貞が宣教師との直接的交流から西洋画法を摂取し、宋時代以降、伝統的な勸戒画として描き継がれてきた画題に、写実的な空間構成を採り入れた成果として『耕織図』が生まれたこと、それが「新たな中国絵画の可能性」を示すものであったと評価する（註39）。また同時に、『耕織図』が宮廷外の画家たちにも速やかに、かつ広範に普及し、中国だけでも複製本が多数刊行されたことを指摘している（註40）。

日本の画家が自作に『耕織図』を参照した一例として、華山《月下鳴機図》（静嘉堂文庫美術館所蔵、十九世紀）における家屋の描写と構図に、『耕織図』「織」部からの転用が指摘されている（註41）。あるいは、藤堂家旧蔵の華山筆「窮民図」も『耕織図』を参照して制作されたのかもしれない。『耕織図』の和刻本を含むどの版を参照したのか特定することは難しいが、華山の作例を考慮しても、栗谷が『耕織図』に触れうる環境にいたことは明白である。

尚蔵館本の上巻では、『耕織図』「耕」部からの図像転用が見出される。具体的な例として冒頭の「淫霖田為湖」では、豪雨で川が氾濫し、田畑が濁流に飲みこまれる光景を不安気に眺める母子（図7）が描かれている。この図像は、『耕織図』「耕第一図 浸種」（図8）からの転用である。門木に手をかける子ども顔の向きが異なるが、格子から顔をのぞかせる子ども、玄関、塀、家屋の構造、樹木の配置などはほぼ一致する。

次の「腐麥爛化蝶」では、莖を広げて麦を篩にかける様子（図9）が描かれるが、ここでも『耕織図』「耕」部から二図を転用している。まず、篩を腰のあたりに抱える農民、籠の中身を啄む鶏やそれを制する子ども姿や位置、背後にある家

屋が『耕織図』「耕 第十九図 籠」（図10）からの転用である。他方、『耕織図』では小窓から女性と子どもが顔をのぞかせるが、尚蔵館本では省かれている。また、『耕織図』に見られる遠近法を用いた家並みは描かれていないが、水辺の場景という舞台設定は共通する。左方に移動すると、網代箕を頭上高く掲げる男と後ろ姿の男（図11）、そちらに視線を向ける樹下の女と子ども（図12）が、『耕織図』「耕 第二十図 簸揚」（図13）の図像に做ったものとわかる。『耕織図』では近接する二つの図像が、尚蔵館本では画面の長さに合わせて位置が変更されているのである。そして「早越祈降雨」では、跪き拱手して雨乞いをする人びとの姿（図14）が『耕織図』「耕 第二十三図 祭神」（図15）から左右反転して転用されている。尚蔵館本では広い沼のほとりで供物を捧げ、天に祈るさまを描くが、『耕織図』では舞台が町中であり、祭壇の上に神像が掛けられている。

尚蔵館本と『耕織図』の図像的な共通性を直接示すものは、上巻の一部に限られる。さらに、『耕織図』「織」部からの図像転用は認められず、もっぱら「耕」部に依拠している。また、『耕織図』に顕著な遠近感の表出は、尚蔵館本には認められない。そうした観点からすれば、尚蔵館本の制作における『耕織図』からの影響は限定される。だが、栗谷が『耕織図』に範をとったのは、それが中国の皇帝や皇太子が農耕や養蚕の労苦に思いをはせるべく描かれた、勸戒画の伝統的な画題であることを前提としている。尚蔵館本もまた、明治天皇が民衆の艱難辛苦に御心を向けるべきことを説く勸戒画であり、『耕織図』が尚蔵館本と思想的に共鳴するゆえに、図像の着想源として採用されたのであろう。

ところで、栗谷の画業における中国絵画受容に関連して、春耕は「先生の画の昇進せしは、津和野多胡氏の所蔵、兪宗礼の画帖を摹写せしより自得せられし」と述べ、清時代の画家・兪宗礼（生没年不詳）の影響を指摘している（註42）。逸齋が所持した兪宗礼の画帖は、『耕織図冊』と『昔賢佳話冊』の二帖があったらしく（註43）、前者は逸齋から華山に譲られ、さらに所蔵者を変えて先述の菊池家に入ったが、栗谷の「窮民図」とともに関東大震災で焼失した（註44）。『耕織図冊』は図版が遺されておらず、その様相はわからないが、尚蔵館本とも関わる画題だけに、その亡失が悔やまれる。

『昔賢佳話冊』については、多胡家所蔵品として、『東洋美術大観』第十二冊（審美書院、一九二二年）や『南宗名画苑』第二十一輯（審美書院、一九一六年）などに一部図版と短い解説文が掲載されているほか、津和野出身の井上蘭崖（一八七五—一九四七）が詳細な報告をしている（註45）。『昔賢佳話冊』の現所蔵者は不明なが

ら、高知県立図書館に陸軍軍人の長屋重名（一八四四～一九一五）による模本《清  
愈宗禮昔賢佳話三十図》（一八七五年）と（註46）、鉄斎美術館に村田香谷  
（二八三～一九一三）による模本をさらに富岡鉄斎（一八三六～一九二四）が再写  
した重模本があり、図像をうかがい知ることができる。蘭崖によれば、《昔賢佳話  
冊》は華樁系の画家たちに珍重され、その与えた影響が頗る大きく、とりわけ「山  
本榑谷杯は尺八絹本に愈宗礼画帖中の絵を引延し、処々自己の作意を添へて描いた  
者が沢山ある」と述べている（註47）。現存する模本と比較して、尚蔵館本と《昔賢  
佳話冊》の間に図像の直接的な繋がりは見出せないが、人物造形などにおいて、榑  
谷がこうした清時代の中国絵画の影響を多分に受けていたことは、今後の課題とし  
ても考究の価値がある。

#### おわりに

これまで見てきたように、尚蔵館本は明治三年の本巻、同十六年の附巻という二  
度の献上を経て成立したものである。それ以前に存在したと想定される稿本は十二  
図であったが、尚蔵館本では十五図となつて献上された。

作者である山本榑谷や小野湖山にしてみれば、尚蔵館本に描かれた世界は、天保  
年間の国内の惨状を目撃した者たちが共有する記憶を喚起するものであり、鑑賞者  
にそれを視覚的に追体験させる機能を有していた。亀井や福羽ら津和野派の面々  
も、若き明治天皇が道徳的にもすぐれた理想的な君主となることを期待して、天皇  
の輔導（教育）のため尚蔵館本の制作を榑谷に命じ、献上したのである。その企図  
は、津和野派が明治初期の神祇政策の目標として掲げた「祭政一致」構想の一端を  
担うものであつたと捉えるべきだろう。

絵画作品としての尚蔵館本は、耕織図という伝統的な勸戒画の面題を踏まえたも  
のであり、榑谷の師である渡辺崋山、焦秉貞や愈宗礼のような清時代画家の作品か  
らの学習成果を反映している。今後は榑谷の画業の全体像のなかで、尚蔵館本の位  
置づけを探ることが必要となるだろう。榑谷研究の進展を期待して稿を閉じたい。

（当館学芸室研究員）

#### 註

- (1) 大槻如電『華山十哲（中）』『国華』第一五一号、国華社、一九〇二年十二月。雅号を「琴  
谷」と表記する文献も多いが、本人は自作に「榑谷」と署名している。したがって、本稿  
では「榑谷」で統一し、引用文などで「琴谷」と表記されている場合には原文のままとし  
た。
- (2) 西田峻子徳「春耕」、白念坊「大槻」如電補訂「琴谷先生事略」『絵画叢誌』第一六八  
一七〇巻、絵画叢誌発行所、一九〇一年一～三月。大槻、前掲書（註1）、「華山十哲  
（中）」の榑谷に関する記述も、「琴谷先生事略」に依拠している。榑谷に関する文献とし  
て、桑原羊次郎編著「島根県画人伝」（島根県美術協会、一九三五年）、「企画展 山本琴  
谷の世界」〔図録、益田市立雪舟の郷記念館、一九九七年〕などがある。
- (3) 逸齋と青厓、華山の交流については、以下を参照した。古川修「多胡逸齋と渡辺崋山」  
『アトリエ』第十三巻第二号、アトリエ社、一九三六年二月（同「美術論萃 正編」学而  
書院、一九三六年に再録）。相見香雨「多胡逸齋と渡辺崋山（上）」逸齋の在府日記を中心  
として『南画鑑賞』第十三巻第二号、南画鑑賞会、一九四四年二月。菅沼貞三「崋山の  
研究」木耳社、一九六九年。
- (4) 安西於菟（雲煙）『近世名家書画談』三編上、赤志忠七、一八九二年、二四一頁。
- (5) 角野広海「山本榑谷が描いた津和野藩邸内の杉戸絵」『島根県立石見美術館ニューズレ  
ター』第三十六号、島根県立石見美術館、二〇二三年二月。
- (6) 諸橋轍次『大漢和辞典』巻六、大修館書店、一九九一年、八三八頁。
- (7) 『於村呂我中』では献上日を八月十三日とするが、『太政類典』は献上者である亀井の名と  
ともに七月十日と明記しており、本稿でもこの日付を採用した。
- (8) 福羽の生涯と思想については、加部嚴夫編「木園福羽美静小伝」（福羽逸人、一九〇八  
年）、松本愛重「福羽美静翁の経歴」（開校四十年 分立二十五年 記念講演集）東京女  
子高等師範学校、一九一六年）、「福羽美静」（近代文学研究叢書）第九巻、昭和女子大学  
光葉会、一九五八年）、小平美香「国学者・福羽美静の思想と信仰」（『神道宗教』第  
二五四・二五五号、二〇一九年七月）に詳しい。
- (9) 宮本善士「文学御用掛としての福羽美静と近藤芳樹」『国学院大学研究開発推進センター  
研究紀要』第四号、国学院大学研究開発推進機構研究開発推進センター、二〇一〇年三  
月、一三九頁。
- (10) 橋本領、尾崎雄二郎ほか訳『世界古典文学全集 第二巻 詩経国風 書経』筑摩書房、  
一九八一年、三四七、三四九頁。
- (11) 幕末から続く福羽と長州藩閥の密接な連携については、武田秀章「近代天皇祭祀形成過  
程の一考察―明治初年における津和野派の活動を中心に」（井上順孝、阪本是丸編著『日  
本型政教関係の誕生』第一書房、一九八七年）に詳しい。
- (12) 妻木忠太編『木戸孝允文書 第四』（早川良吉、一九三〇年、六十九～七十、七十三～  
七十四頁）所収の福羽宛書簡（一八七〇年六月十七・二十五日付）、および同編『木戸孝允  
日記 第二』（早川良吉、一九三二年、三六五～三六六頁）所収の一八七〇年六月十八日  
条による。



(13) 宮内庁書陵部図書課図書寮文庫所蔵「木戸家文書(人一八六)」函架番号:F一五、枝番号:〇三三三。書陵部所蔵資料目録・画像公開システム <https://shoyobu.kunaicho.go.jp> (二〇一三年二月十三日最終閲覧)。

(14) 維新政権における津和野派の動向については、阪本是丸『明治維新と国学者』(大明堂、一九九三年)、ジョン・グリーン『儀礼と権力 天皇の明治維新』(平凡社、二〇一一年)を参照した。

(15) 明治天皇の教育については、近藤啓吾『明治天皇の御修学』(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十五号、明治聖徳記念学会、二〇〇八年十一月)、伊藤之雄『明治天皇 むら雲を吹く秋風にはれそめて』(ミネルヴァ書房、二〇〇六年)に詳しい。近藤氏は、明治天皇が踐祚後、天皇として修学した端緒を明治元年(一八六七)の福羽による『古事記』御進講としている。

(16) 「艱民圖のゆゑ与之」本文は、加部、前掲書(註8)、『木園福羽美静小伝』八十四、八十六頁に引用されている。

(17) 宮内庁『明治天皇紀』第六、吉川弘文館、一九七一年、七十九〜八十頁。

(18) 宮内庁書陵部図書課宮内公文書館所蔵『恩賜録 三 明治十六年』識別番号:一九四一三。書陵部所蔵資料目録・画像公開システム <https://shoyobu.kunaicho.go.jp> (二〇一三年二月十三日最終閲覧)。

(19) 小野長原(湖山)編『賜研楼詩』鳳文館本舗、一八八四年。学習院大学史料館所蔵「福羽家史料」には、福羽が同書に寄せた詞書「小野湖山翁はいま恩賜の栄を得たり これ其すくれたる学意のほまれなるへしとおもへは 美静」のある和歌草稿「君よ君深きまでともあらはれて すゝりの海のけふのたまもの」(資料番号 五―二十一)が含まれている。

(20) 西田、前掲書(註2)、『琴谷先生事略』『絵画叢誌』第一六九巻、六頁。湖山の生涯と事蹟については、小野芳水編『小野湖山翁小伝』(豊橋市教育会、一九三二年)、今関天彭『小野湖山』(『書苑』第三卷第十二号、三省堂、一九三九年十二月)を参照した。湖山は華椿系の画家たちとも親しかった。

(21) 『鄭絵餘意』には明治三年の序文があるが、刊行は明治八年(一八七五)とされる。小野、前掲書(註20)、『小野湖山翁小伝』七十四頁。序文と同じ年に本巻の献上が行われており、何らかの繋がりも想定できる。また、明治八年に『鄭絵餘意』が皇室に献上されたとする説もあるが、管見の限りそれを裏付ける資料はない。なお、『鄭絵餘意』の書名は、安井息軒(一七九九〜一八七六)の『題耕織図』に影響されたとする指摘がある。今関、前掲書(註20)、『小野湖山』三十頁。息軒の『題耕織図』は、北宋の鄭侠が『流氓図』を描いて主に献上し、戒めとした故事に言及している(安井息軒『息軒遺稿』巻之三、安井千菊、一八七八年)。「鄭絵餘意」という書名も、鄭侠『流氓図』に因んだものである。

(22) 西田、前掲書(註2)、『琴谷先生事略』『絵画叢誌』第一六九巻、七頁。

(23) 大槻、前掲書(註1)、『華山十哲(中)』一三二頁では、献上を元治元年(一八六四)のこととする。

(24) 明治十一年(一八七八)、湖山は二條の死にさいして、「忽地朝来聞訃音。哀々鳴雁感人深。懷恩有淚禁難得。落日西山一片心」と詠んでいる。小野、前掲書(註20)、『小野湖山翁小伝』五十三頁。

(25) 小野、前掲書(註20)、『小野湖山翁小伝』四十九頁。

(26) 安政五年(一八五八)、二條が勅使として関東へ下向した折、津和野藩が接待掛を命じられ、福羽が応接役になったという。しかし、幕末における両者の接点は、このほかに詳らかにしない。加部、前掲書(註8)、『木園福羽美静小伝』十〜十一頁。

(27) 太鼓谷本の概要については、以下を参照した。前掲書(註2)、『企画展 山本琴谷の世界』、『津和野藩主亀井家の四〇〇年 三館連携特別展 藩主亀井家入城四〇〇年』図録、亀井家入城四〇〇年記念事業実行委員会、二〇一七年。

(28) 佐藤温「富商大橋淡雅の文事と時局」『近世文藝』第八十六号、日本近世文学会、二〇〇七年七月。

(29) 国華俱樂部編『罹災美術品目録』一九三三年、吉川忠志、六十五頁。

(30) 西田、前掲書(註2)、『琴谷先生事略』『絵画叢誌』第一六九巻、七頁。

(31) 藤森成吉『渡辺華山』改造社、一九三五年、六四二〜六四三頁。

(32) 藤森成吉『渡辺華山の人と芸術』春秋社、一九六二年、六十一頁。

(33) 蔵原惟人「山本琴谷の「窮民の図」について」『文化評論』第十二号、一九六二年十一月、六十二頁(同「渡辺華山 思想と芸術」新日本出版社、一九七三年に再録)。初出誌と再録本では、掲載された図版が異なる。

(34) 蔵原、前掲書(註33)、「山本琴谷の「窮民の図」について」六十三〜六十五頁。

(35) 田原藩士としての華山については、小澤耕一『渡辺華山研究—三河田原藩の周辺と画論を中心に』(日本図書センター、一九九八年)、入交好脩『渡辺華山—その研究史の一素描』(『経済史学』七輯、早稲田大学経済史学会、一九五三年十一月)を参照した。

(36) 三宅康直宛書簡(一八三六年日付不明)、別所興一訳注『渡辺華山書簡集』平凡社、二〇一六年、三八七頁。

(37) 宮崎幸麿『好古小集録』第八編、宮崎幸麿、一八八九年、十頁。好古社は、明治十四年(一八八一)に福羽が結成した古典籍、古書画、古器物の愛好団体。津和野出身者が多く参加した。

(38) 蔵原、前掲書(註33)、「山本琴谷の「窮民の図」について」六十七頁。

(39) 小林宏光『中国版画史論』勉誠出版、二〇一七年、四一〇頁。

(40) 小林、前掲書(註39)、『中国版画史論』四一〇頁。渡辺武「清代の焦秉貞画「御製耕織図」とその系譜」(『町田市立博物館蔵 たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』図録、町田市立博物館、二〇〇〇年)も参照のこと。なお、本稿では東京藝術大学附属図書館所蔵本を底本とした。

(41) 上野憲示「華山の人と芸術」『武士と文人の間で 渡辺華山』図録、栃木県立美術館、一九八四年。

(42) 西田、前掲書(註2)、『琴谷先生事略』『絵画叢誌』第一六八巻、七頁。

(43) 相見香雨「張思光図 兪宗礼筆」『世界美術全集』第二十六巻、平凡社、一九二九年、

(44) 前掲書(註29)、『罹災美術品目録』六十九頁。同目録に「多胡逸齋より渡辺華山に譲られ、横浜木村氏に伝来したるもの」とある。なお、明治四十五年(一九一三)に旧田原藩主の三宅子爵家書庫より発見された『進書目録(第二)』に、「兪宗礼耕織図 絹本一冊」の記載があり、華山旧蔵の事実を裏付ける(鈴木清節編『華山全集』第三版、華山会、一九三八年、三一三頁)。なお、井上蘭崖「兪宗礼画帖に就て」(『絵画叢誌』第三四三号、東陽堂、一九一六年四月、八頁)によれば、この画帖は白描画だったという。

(45) 井上、前掲書(註44)、「兪宗礼画帖に就て」。蘭崖の証言によると、『昔賢佳話冊』は絹本着色、二帖。法量は縦二尺、横一尺五寸。各帖十六図、計三十二図だが、帖中の「王昌齡図」款記によれば、当初は六十四図であった。同じ款記により、乾隆三十年(一七六五)の制作とされる。逸齋が文政十二年(一八二九)に某幕臣より二百両で購入したが、藩内より暴拳として咎められ、やむなく華山に売却を依頼し、そのまま預けられた。しかし、華山が蚕社の獄に連座したさい、逸齋にも累が及ぶことを恐れて返却されたという。杉浦明平『華山探案』(岩波書店、一九九八年、一〇五〜一〇六頁)によれば、『昔賢佳話冊』は戦後、多胡家から離れたとみられる。

(46) 高知県立図書館デジタルギャラリー <https://kochilibri-project.org> (二〇二三年二月十三日最終閲覧)。同模本については、島根県立石見美術館・角野広海氏よりご教示いただいた。

(47) 井上、前掲書(註44)、「兪宗礼画帖に就て」十頁。角野氏のご教示によれば、栗谷作品のなかには、これら模本と共通する図像が少なからず看取されるという。角野氏による他日の詳論を待ちたいが、『グラントワニュース』第七十四号(島根県芸術文化センター、二〇二三年五月)にその一例が紹介されている。

謝辞

本稿の執筆にあたり、島根県立石見美術館・角野広海氏、津和野町郷土館・小杉紗友美氏、学習院大学史料館・那須香織氏、梅田優歩氏、鉄斎美術館・細里わか奈氏より貴重なご教示、ならびに資料調査等のご高配を賜った。また、太鼓谷稲成神社、東京藝術大学附属図書館からは、画像掲載に係るご許可を賜った。

資料の翻刻にさいしては、当館学芸室・山田千穂研究員の終始懇切な協力と教示を得たが、言うまでもなく最終的な文責はすべて稿者が負うものである。末筆ながら皆さまに深甚の謝意を表したい。

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	図
發倉賑貧民	困迫為強盜	老弱病凍餒	抱財餓屋内	飢渴相奪食	樹皮支饑急	窮乏民賣子	草根纒續命	流民飢乞食	洪水流人家	羣蝗害粳稻	暴風傷禾黍	早魃祈降雨	腐麥爛化蝶	淫霖田為湖	尚蔵館本
			施穀粟賑窮困	病苦凍餒極其慘	餓者相奪為食	盜賊成群	掘艸根剥樹皮	流民乞食	洪水暴漲	驅蝗	大風傷禾稼	苦旱禱雨	麥實化為蝶	霖後田疇渺如大湖	『鄭繪餘意』
發倉賑貧民	困迫為強盜	老弱病凍餒	抱財餓屋内	飢渴相奪食	窮乏民賣子	樹皮支饑急	草根纒續命	流民飢乞食	洪水流人家	羣蝗害粳稻	暴風傷禾黍	早魃祈降雨	腐麥爛化蝶	淫霖田為湖	太鼓谷本

表1 尚蔵館本と『鄭繪餘意』、太鼓谷本の小題比較

【資料①】加部殿夫編『於村呂我中 亀井勤斎伝』中山和助、一九〇五年

明治三年、八月十三日。艱民図二卷ヲ上ル。図ハ、旧藩ノ画師山本栞谷ノ筆ニ成レリ。維新前、侯、曾テ此図ヲ作ラシメ、聖上乙夜ノ覽ニ供スルノ宿志アリ。便チ、栞谷ニ命ズ。栞谷、命ヲ受クルノ後、其図ノ極メテ大作ニシテ、尋常意匠ノ、能ク及ブ所ニ非ザルヲ以テ、經嘗慘怛内外古今大家ノ筆墨ニ鑑ミ、稿ヲ更ムルコト数回。五タビ春秋ヲ閱シ、茲ニ初メテ稿ヲ脱セシナリ。卷成リテ、之ヲ奉獻シ、侯ガ積年ノ宿志ヲ遂ゲラレシモノ、其詳細ハ、左ニ掲グル所ノ、当時ノ記録ニ在リ。

別紙、目錄之通、知事茲監より、献上仕度旨、從津和野表申越候に付、差出申候。宜御取成、奉願上候以上。

庚午八月十三日 津和野藩公用人 湯権少参事

辨官 御伝達所  
献上願書

先般、藩士山本栞谷と申者へ、艱民図為画候に就、不苦候者、奉献上度。聊、臣之微志を表し候迄に御座候。宜御執奏、懇願候、謹白。

庚午七月十日 亀井津和野藩知事茲監

辨官御中

献上目錄

画卷物。艱民図、 式軸。

筆者

艱民図、 山本栞谷。津和野藩士。

上巻題字、 三條西侍従。

下巻題字、 木戸参議。

画中小字、 小柴津和野藩権大参事。

以上

右献納ヲ 間食サレ、宮内卿ヲ経テ、左ノ褒詞ヲ賜ヘリ。

艱民図献上、奏覧候所、全く、積年意を稼穡に用るの厚き、御満足被思召。仍此段申入候事。

此画卷、最初ヨリ、今献納ヲ了スル迄ニハ、種々ノ手数ヲ経タルモノナルガ、其ハ姑ク聞キテ、題辭ノ撰定、揮毫等ニ就キテハ、主トシテ、福羽美静始、文三郎、今ノ子爵ノ尽力ニ成レリ。因リテ、其等ノ文書ヲ左ニ記載ス。

爾来、益御萬佳、珍重存申候。扱、過日拝見之巻物、永々留置、難有存申候。右に御認相成候文字、別紙、一二抄出致し候間、御扱可被成候。此意味合にて、宜歎と存申候。猶、拝芝、万々申上候也。

四月五日

秋月大学大監

三公調陰陽。 漢書、

(不用)

天道之休咎由人事之得失。右ハ、書經ノ語ノ注解ナリ。(上巻)

聖時風若。 書經、上ニ聖徳アレバ、風雨シ (下巻)

御安全、令賀候。抑、一昨日は、寛々得貴面、彼是御世話、大幸候。祭祀も、御無異、珍重存候。扱、染毫物事、未眼疾、とんと不快候へども、余り延引故、書付候。元来拙筆之上、別て見苦敷仕合、何卒、余人へ御頼は如何哉。何分先は御断印迄、相認差出候事に候。

書外、期御面会候。参内前、甚失礼之書中、高免可給候也。五月八日 季知

福羽神祇少副殿

爾後、弥御清栄、奉大賀候。さては、過日被仰聞候題字之義、一応認見候へ共、余り鉄面皮之至にて、差出し候にも、不堪赤顔、如何可仕候哉と、苦心仕居候所、自然遷延にも至り、奉恐人候間、此儘一先入貴覧申候。何卒、可相成は、他へ御命被下度、奉願候。委曲拜趨之上、可申上と奉存候所。彼是取紛、今日は御無沙汰申上候。いづれ其中、拝青可申上と奉存候。草々頓首。 六月廿五日

福羽先生

孝允拜呈(乙第八号)

是後、明治十五年ニ至リ、子爵福羽美静、小野湖山ヲシテ、艱民図ニ題スルノ詩ヲ書セシメ、副卷トシテ之ヲ奉獻セリ。

【資料②】「津和野藩知事亀井茲監藩土山本琴谷画艱民圖艱民  
図献納」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:  
A15071331700 太政類典・第一編・慶応三年〜明治四  
年・第百八十四卷・理財・雑三、国立公文書館

三年七月十日

津和野藩知事亀井茲監藩土山本琴谷画艱民圖献納

津和野藩知事亀井茲監願 辨官宛

先般藩土山本琴谷ノ申者艱民圖爲画候ニ付不苦候  
者奉獻上度聊臣ノ微忠ヲ表候迄ニ御坐候宜御執奏  
奉懇願候謹白

筆者目録

艱民圖 二軸 山本琴谷

題字 三條西侍従

同 木戸参議

画中小字 小柴津和野藩権大参事

以上

亀井津和野藩知事へ達 宮内卿

今般艱民圖献上奏 覧候處全積年意ヲ稼穡ニ用ル

ノ厚 御満足ニ被 思召候仍此段申入候事三年閏十月十日

八日

### 【資料③】「艱民圖のゆゑ与之」(原文まま)

艱民圖のゆゑ与之

難波の高津宮に、あめの下しろしめし、天皇は、  
炊煙を望みまして、三年租税をゆるしたまひて、  
延喜の聖帝は、寒夜に御衣をぬかせたまひて、  
萬民の疾苦をおもほしたまへるなど、千載の  
今にかたりつたへて、ひろきあつきおほみ

いつくしみを、誰かはあふきたてまつらざるべき、  
往し明治三年といふとしの秋のころ、龜井津和野藩

知事、その藩の畫工、山本琴谷をして艱民圖をつくら  
しめ、これを朝廷にたてまつれり、その上巻の題辭、  
天道之休咎、由人事之得失、の字は、故三條西正一位の筆、  
下の巻、聖時風若、の字は、故木戸参議これをしるせり、  
又巻中各圖の題辭は、小柴津和野藩権大参事の  
かけるものなり、」さて畫工琴谷は、画法を渡邊華山

に學ひ、人物専門をもつて其名を博せり、故に、安西  
庸吉か書畫談にも、佛道人物士女妙、隆古琴谷稱  
出塵、などありて、當時の名手にてさへありつれば、  
千辛萬苦、稿を更ふること数次、はしめ十二幀として、  
これを當時の識者にたたし、その批評を

乞へるなり、あるひは些少の議論なきにあらず  
といへとも、みるものをして膚に粟するの想を  
なさしめき、」ここに當時の儒家、小野湖山これを  
觀て、感歎にたへず、毎圖に詩を題し、その詩を

鄭繪餘意といへり、されと湖山みるところの  
ものは、なほ稿本のをりのなれば、これを後の  
脱稿のものにくらふれば、たらざるものありて、  
全く符合せず、このころ福羽参事院議官、その詩  
と畫と、未全かなはざる事を憾み、ねかはくは  
これをあはせてたてまつらむことをおもひ、宮内卿  
につきてそのことをきこえあげ、やかてこの畫卷  
を申くたして、これを湖山にしめし、その

詩のたらざるを補ひ、あはせてこれを書せしめ、  
艱民圖の副卷となせり、其卷端、思艱圖易、の  
字は、三條太政大臣の題せられしなり、」古人いはく、詩は  
有聲の畫なりと、画もとより無聲の詩なれば、  
二つなからいま全く備はれり、こゝにおいてか、  
きすなきの壁ともいひつべし、」いはまは、  
かしこけれど、今のすめらみこと、大御代の始より、

大御政を古に復したまひて、肇國しろしめして  
より、みいつくしみは、筑波山のかげよりもしげく、

みめくみの波は、あを雲のむかふすかきり  
みちわたりて、いにしへもかゝるためしはたくひ  
稀なるを、そのうへにも、あめの下のおほむたか  
らのうへをおもほしめして、東の間もおもほし  
はなちたまふ事とはあらざりけらし、  
さてこそこの艱民圖のことも、御あたり

近くおかせたまひて、萬機のみにとまに  
ひもときたまひ、畫をみそなはしては、萬民  
の艱苦をおもほしやり、詩をうたはせたまひ  
ては、牧民のつかさのかたきをおもひはからせ、  
民をみそなはすこと子のことく、そのつかさ

をおもほすこと、おほし手足のことくならば、  
大御功業は、高津宮のたかとのよりもたかく、  
おほみめくみは、ひしりの御世のむかしにも  
まさりぬべけれ、」今かの畫卷をかへし

たてまつり、またその副卷をたてまつり  
あくるのときにあたりて、まのあたり見き、  
つる事のゆゑ与之ともを、かきそへよ、と議官  
のいはるゝに、いとくかしこけれど、議官はおのの  
もの學の師にてさへあれば、いなひかねて、  
つたなき筆をとり侍るにこそ、あなかしこ  
明治十六年二月 加部嚴夫謹識 白文方印「嚴夫」

小野湖山は忠貞の老儒にて謙遜する  
人なり美静しひて書せしめ艱民圖  
の附卷としてつつしんで献上すかの圖の由来は加  
部嚴夫をしてしるさしめ侍りぬいまこれを  
天庫にをさむるの栄を得るはまことに高恩のいたり  
なりあなかしこ  
明治十六年三月

参事院議官從四位勲二等 福羽美静  
朱文楯田印「美静」

和暦	西暦	月日	関連事項	出典
文化8	1811	11月	石見国津和野に山本栞谷が生まれる。幼少期から画を好み、後に多胡逸斎の手ほどきを受ける。逸斎の江戸出府に伴われて、同地で桜間青厓、渡辺華山に師事する。また、高久齋屋、椿椿山にも学ぶ。	「琴谷先生事略」
文政12	1829	—	逸斎が某幕臣より、兪宗礼《昔賢佳話冊》を大金で購入する。藩内からの非難を受けて、友人の華山に同画帖を預けることになる（後に返却される）。	「兪宗礼画帖に就て」
天保6	1835	11月	華山が田原藩内に義倉「報民倉」を設置し、大凶作に備える。	『渡辺華山の神髄』
天保12	1841	10月11日	華山、自刃。	『渡辺華山の神髄』
嘉永6	1853	—	この頃、栞谷が津和野藩の絵師となる。	「琴谷先生事略」
元治2 慶応元	1865	—	この頃、二條家家臣・村山善広の勧めによって栞谷が《窮民図》（あるいは稿本）を描き、二條斎敬を通じた孝明天皇への献上が計画されたか。	「琴谷先生事略」
		—	この頃、二條家家臣・山中弘庸の仲介で稿本を見た小野湖山が詠詩したか。	『小野湖山翁小伝』

明治2	1869	—	この年、亀井茲監、福羽美静が中心となって尚蔵館本（本巻）の献上が計画される。福羽の依頼を受け、秋月種樹、正親町三條実愛、中山忠能らが題字の選定にあたる。	「艱民圖献納一件文書」／「木戸家文書（人186）」
明治3	1870	4月5日	秋月が『漢書』と『書経』から本巻の題字候補を挙げ、福羽に提案する。その後、福羽の判断で『書経』から題字を採用する。	「艱民圖献納一件文書」／『於杼呂我中 亀井勤齋伝』
		5月	福羽が三條西季知に本巻（上巻）の題字揮毫を依頼する。	「艱民圖献納一件文書」／『於杼呂我中 亀井勤齋伝』
		6月	福羽が木戸孝允に本巻（下巻）の題字揮毫を依頼する。	「艱民圖献納一件文書」／「木戸孝允日記」
		7月10日	<b>亀井が本巻を明治天皇に献上する。</b>	『太政類典』
		—	この年、湖山が漢詩集『鄭絵餘意』を編纂。	『鄭絵餘意』
		—	これ以降、尚蔵館本の副本が数点制作される。その後、亀井家より太鼓谷稲成神社に副本が奉納される。	太鼓谷稲成神社口承
明治4	1871	8月	菊池静軒所蔵の副本のため、湖山が題画詩を寄せる。	「琴谷先生事略」
明治6	1873	10月13日	栞谷が信州を遊歴中に客死する。	月窓寺栞谷墓碑
明治8	1875	—	この年、湖山が『鄭絵餘意』を皇室に献上したか。	『小野湖山翁小伝』
明治12	1879	—	藤堂家所蔵の渡辺華山《窮民図》を加部巖夫が模写する。	『好古小集録』
明治15	1882	—	この年、福羽により尚蔵館本（附巻）の献上が計画される。福羽の仲介で、御物となっていた本巻を湖山が借覧する。	「艱民圖のゆゑ与之」
		12月	湖山が新たに三首を賦し、附巻を脱稿する。	尚蔵館本（附巻）跋
明治16	1883	2～3月	福羽、加部により「艱民圖のゆゑ与之」が脱稿する。	「艱民圖のゆゑ与之」
		4月	<b>福羽が附巻を明治天皇に献上する。</b>	尚蔵館本（附巻）「献上目録」
		7月9日	湖山の代理として、息子の正弘が召され、端溪の硯と羽二重を下賜される。感激した湖山は、新築の書齋を「賜研楼」と命名する。	『明治天皇紀』／『恩賜録3 明治16年』／『小野湖山翁小伝』
明治17	1884	8月	附巻の献上と硯の下賜を記念した漢詩集『賜研楼詩』が刊行される。湖山のほか著名人による漢詩とともに、題字を三條実美、序文を杉孫七郎、賀詞を金井之恭、巖谷修、和歌を福羽らが寄せる。	「賜研楼詩」
明治22	1889	5月5日	春季好古会で加部が模写した《窮民図》が展覧される。	『好古小集録』
大正12	1923	9月1日	関東大震災により、菊池家本が焼失する。	『罹災美術品目録』
昭和37	1962	11月	蔵原惟人が蔵原家本に関するエッセイを発表する。	「文化評論」
平成元	1989	—	天皇陛下（現 上皇陛下）、香淳皇后より尚蔵館本が国に寄贈される。	

表2 尚蔵館本の関連年表



淫霖田為湖

天之道  
之休  
咎由  
人事  
之得  
失

图1-1 尚藏館本 本卷(上卷)



腐麥爛化蝶



早魃祈降雨



洪水流人家





暴風傷禾黍



羣蝗害梗稻



流民飢乞食



草根纜續命

图1-2 尚藏館本 本卷(下卷)



樹皮支饑急



抱財餓屋內







窮乏民賣子



飢渴相奪食



老弱病凍餒



困迫為強盜



發倉賑貧民

筆者  
 上卷 艱民圖 山本琴谷  
 題字 三條西侍從  
 下卷 同 木戸參議  
 圖中小字 小峯野濤茶市  
 以上

筆者目錄

献上  
 画卷物 艱民圖 二軸  
 意津野濤茶市 法監

献上目錄

# 思銀圖易

藤原實業題



類聚民圖

注霖田為湖  
一室六湖津涯不可極本並法地

圖2 尚藏館本 附卷

推屋是排耳可謂該法倒置者唯不有  
實者無無力深何其之在日在旦夕

### 旱秋發險

什根柢何苦未極流先未未利更難  
未利在是飢飢種種最難最難於於見  
替之心深存相創力教問問其其何苦  
丁壯柢何為丁壯困力復展去夜未歸  
衣必展展山喘：精力在困極或為歸  
景亦種的種種種一若若不全全先悲  
苦於太平日不其其深深時使民至此極  
其罪可謂深

### 窮三民賣子

我計半秋極極極極極極極極極極極  
況於斯人子愛子也：種不倫與共思  
愛之置極理以：華中理之防患當  
老之忘考功人至費子子心傷一難無  
誰料誰信信信滿通通通通通通通通  
買者用買相買買買買買買買買買買  
官有必關稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅稅  
議之災甚道生親之古學之風風風風  
樹後生傷感

### 樹後生傷感

我昔天保手親道也：而臨失調和  
芳發我且疾或信在樹皮或或或或  
鐵字活也怪怪怪怪怪怪怪怪怪怪  
只見改令失極有怪乎八寸官病奇保  
舉共群地地地地地地地地地地地地  
香發通未潤異乎三三出威傲至金與款  
民事不之：深深深深深深深深深深

### 飢渴相奪食

人生食為命是家斯是：人宜哉生王政  
食之長長長長長長長長長長長長長  
不難奪奪奪奪奪奪奪奪奪奪奪奪奪  
飯者強強強強強強強強強強強強強  
已無元才好宜三三三三三三三三三  
不及鳥與音

### 抱財餓屋內

## 題艱民圖

### 淫霖田為湖

一望如大湖津涯不可極本是沃饒地  
樹藝宜五穀珍氣禍吾民淫霖幾旬歷  
陰風翻濁浪黯慘無霽色只恐耕桑徒  
化為魚鱉屬萬家失生業相顧空歎息  
爭得補天穿世無媧皇石

### 腐麥爛化蝶

去年播麥種今年成麥秋去年到今歲  
勞勩無時休纔及秋成日又逢陰雨稠  
腐草化為螢蒼鷹化為鳩物化順其性  
於我復奚尤如何變化蝶長作黎元憂

### 早魘祈降雨

高田已焦土低田龜兆拆數旬天不雨  
井酒川亦竭杭稻盡枯麥人民亦槁瘠  
所恃唯有神禱祀朝復夕徒見炎毒熾  
未蒙一滴澤我意答祝融何爾肆其虐  
人言衽席上更有老旱魘

### 暴風傷禾黍

禾稼秋將熟青黃滿田疇灌溉功已遂  
耘籽事暫休家々共相祝屈指待穫收  
一朝天氣惡四見頑雲浮須臾狂風起  
激怒聲颯々天地為震撼禍患及幾州  
禾偃無可起慘怛奈此憂為問牧民吏  
預備有方不

### 群蝗害梗稻

食根謂之蝨食節謂之賊有螟又有蝨  
要皆蝗之屬驅蝗或捕蝗各土因舊俗  
鐘鼓響郊野燈炬光赫々有似兒童戲  
安知慘心極我聞蝗之生原由吏貪黷  
吏胥視無慚蒼生被其毒所以仁賢主  
撰能任其職

### 洪水流人家

大哉水之利甚哉水之害當其順流時

驚駭迄京闕昇乎二百歲俄然金甌歛  
民事不可緩救荒是第一

### 飢渴相奪食

人生食為命無食斯無人宜哉先王政  
食在喪祭先後世重貨財視食如輕然  
不難奪農時不重廢民田一旦逢凶荒  
餓者紛成群攘臂相奪食聲厲色怒瞋  
已無兄弟好豈知隣里親痛哉萬物靈  
不及鳥與鳶

### 抱財餓屋內

倉庫積貨財兒女重錦綺出人擬王侯  
亭臺高且美自居何驕奢視人如犬豕  
毫矣施與心寧解應報理天地好生々  
雨露無窮已儒佛好生々仁慈成終始  
有智恃智亡有財抱財死傷哉不須傷  
出爾者反爾

### 老弱病凍餒

手脚瘠如柴顏面垢如土有病不得藥  
無家何處歸叩門索餒餘挽袖訴困苦  
唇焦而口燥所得果幾許安知情農徒  
化為飢寒旅或恐腹削餘子父失其所  
一飽終無期在世亦何補似聞鬼啾啾  
自覺神淒楚不見互市場酒肉飽點買  
困迫為強盜

### 小盜事穿窬

小盜事穿窬大盜事強奪暴橫欺孤寡  
抄略恣架黠汝輩亦人耳稟性何險猾  
疊々就拘囚後先係刑辟我思罔民語  
緣由殆難說盜祿私妻子盜權禍家國  
滔々天下是誰能行其罰

### 發倉賑貧民

油雲下沛雨稿苗興勃然善哉鄒孟語  
一誦可喻人如何大小吏一年暴一年  
只聞誅求急不見撫育仁物價日騰貴  
歎怨聲相連朝昏支無計欺詐勢使然



図4 太鼓谷本「早魃祈降雨」部分



図3 太鼓谷本「早魃祈降雨」部分

図7 尚蔵館本「淫霖田為湖」部分

図6 太鼓谷本「抱財餓屋内」部分

図5 太鼓谷本「暴風傷禾黍」部分



図10 『耕織図』「籠」部分

図9 尚蔵館本「腐麥爛化蝶」部分

図8 『耕織図』「浸種」部分



図13 『耕織図』「簸揚」部分

図12 尚蔵館本「腐麥爛化蝶」部分

図11 尚蔵館本「腐麥爛化蝶」部分

※太鼓谷本の画像は、津和野町郷土館より提供を受けた。  
また、『耕織図』は東京藝術大学附属図書館所蔵。画像提供も同館による。

図15 『耕織図』「祭神」部分



図14 尚蔵館本「早魃祈降雨」部分

- ・三の丸尚蔵館年報・紀要中、作品名や作者、制作年などの表記は、年報・紀要発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要の著作権は宮内庁に属し、本ファイルを改変、再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は、書籍と同様に<sup>1</sup>出典を明記してください。また、図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は、宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお、図版を営利目的の販売品や広告、また個人的な目的等で使用することはできません。

三の丸尚蔵館年報・紀要

第29号

令和4年度

編集：宮内庁三の丸尚蔵館

（東京都千代田区千代田1-1）

発行：宮内庁

制作：株式会社アイワード

（札幌市中央区北3条東5丁目5番地91）

翻訳：株式会社イー・シー

令和5年6月30日発行